

お お く ぼ ちょう  
大名考 大久保町

## 大礎石が残る大窪寺跡

檀原市の発足（昭和三十一年）で「大久保町」となった当地は、明治二二年に白檀村の大字「大久保」となるまで、江戸時代を通じて「大窪（おおくぼ）村」と呼ばれていた。

「大窪」の最も古い記録は、日本書紀の天武天皇・朱鳥元（六八六）年条に「大窪寺」として登場しています。この寺は当時、畝傍山の北東約六〇〇メートルの平坦地に立地したようです。いま同町にある国源寺のあたりが「大窪寺跡」だと伝えられています。そこに大久保寺の塔の中心柱を支えたといわれる、露出した大きな礎石が残されています。

中世の当地は、南都・興福寺関連の荘園（領地）となっていたようです。従って興福寺に属した当地の豪族・越智氏が室町時代から戦国時代にかけて、しばしば「ここに陣を構え合戦を繰り返した」という数々の古文書も残っています。

大凶作に襲われた江戸時代の明和五（一七六八）年、村人が隣の大谷村などとともに池尻の陣屋（役場）へ押しかけ、お上に対して年貢や上納金の免除を強訴しました。訴えが認められたものの指導者は死刑、村々には厳しい科料（罰金）が課せられたといえます。